

中国東北・極東ロシア 5 都市における都市形成に関する研究

—主体の多様性に着目した街区の変遷とその特徴—

A STUDY ON THE CITY FORMATION IN THE NORTHEAST CHINA
AND FAR EAST RUSSIA 5 CITIES

Changes and its feature of the block which directed its attention to the diversity of a subject

金 鐵 権*, 戸 沼 幸 市**, 佐 藤 洋 一***, 三 宅 諭****

ChouKwon KIM, Koichi TONUMA, Yoichi SATO
and Satoshi MIYAKE

Urban space of Northeast China and Far East Russia could be considered as a stage where cultures and civilizations, provided by emigrants from various regions and countries, were blended and merged, then re-constructed.

This study aims to distinguish the process of formation and changes of cities, referring to their historical backgrounds, which includes activities and changes of rulers. Harbin and Dalian of China, Blagoveshchensk, Khabarovsk and Vladivostok of Russia are the cities mainly investigated for this research.

This paper is fundamental research based on fieldworks done from 1997. Discussion are made over the formation of urban space of northeast Asia considering changes of rulers of the time, which most of the time were also designers of each cities.

Keyword : Northeast Asia, urban history, central district, block pattern

東北アジア、都市形成史、中心市街地、街区形態

1. はじめに

1.1 研究の背景

20世紀後半以降、日本海を取り囲む近隣諸国（ロシア・中国・韓国・北朝鮮・日本）は、東西冷戦構造の終結とそれに伴う政治・経済の転換期を迎え、急速に関心を集めつつある。現下、日本とこれらの国々においては行政レベルで数々の姉妹都市・友好都市関係が結ばれているほか、民間レベルでも様々な交流が行われている。こうした社会経済交流が環日本海の将来を考察する主な手がかりとして、①国境という概念が希薄になりつつあること、②交流の主体が行政・民間にあって個別に自律的な動きを見せていることがあげられ、環日本海地域は、国境という枠組みを越えた新たな交流圏・生活圏を確立する可能性を秘めており、徐々にその姿を現そうとしている。

東北アジアは、しっかりとした統治体制が確立されていないが故に様々な民族や身分、境遇の人々が往来し、そして移住してコスモポリス的な様相を見せてきた。19世紀から20世紀における状況を概観すると、民族としては、白系ロシア人やコサック人、ユダヤ人、中国人、朝鮮人、日本人が流入した。それを身分、境遇からみると、白系ロシア人やコサック人は、ロシアの極東南下政策により施政者、軍人、鉄道技術者、都市建設者として流入し、ユダヤ人はナチスの人種政策により迫害を受けた人々が新天地を求めて移住してきた。中国人や朝鮮人は、鉄道や都市の建設労働者として、日本人は帝国主義政策により満州国建設に伴って軍人、鉄道管理者、開拓者、商人として主に流入

した。そして、それぞれの民族や人種がこの地域での活動を通して、空間形成との関わりを持ったことで多様性を持った都市を形成していった。

1.2 研究の視点・本稿の目的

中国東北・極東ロシアの都市空間は、移住者によって各国・地域からもたらされた文化、文明が混在、融合し、再構成が行われた「場」であると理解し得る。本研究はこの歴史的背景に基づいて多様な都市建設主体の変遷と活動が造り出した都市空間の形成ならびに変容の推移を明らかにすることを目的とする。

1.3 既往研究の整理と本稿の位置づけ

東北アジアに関する都市・建築との関連性に関する代表的な研究は、①中国東北部（旧満州国）の都市計画に関して、越沢の研究が詳しい¹⁾。越沢の研究では、ロシア及び日本という帝国主義政策が行った都市計画に関して、その計画的側面に着目し、評価を与えている。②中国東北部の近代建築に関しては、西澤の研究がある²⁾。西澤の主な研究対象は建築物単体であり、特に植民地特有のデザインに関する記述に詳しい。

本研究では、一国の施政者のみならず、様々な民族や人種、そして技術者や労働者、商人など多様な主体が作用している都市の重層性と都市空間形成との関連を考察する。また、各都市の空間形成の問題をそれぞれの事象として扱うことに止まらず、複数の都市空間形成に関わった主体の活動と空間形成との関連性を扱う。

* 早稲田大学大学院理工学研究科 博士後期課程・工修

** 早稲田大学理工学部建築学科 教授・工博

*** 早稲田大学国際情報通信科 講師・博士(工学)

**** 岩手大学農学部農林環境科学科 講師・博士(工学)

Doctor Course, Graduate School of Science and Eng., Waseda Univ., M. Eng. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Science and Engineering, Waseda Univ., Dr. Eng.

Lecturer, Dept. of Information, Waseda Univ., Dr. Eng.

Lecturer, Dept. of Environmental Science, Iwate Univ., Dr. Eng.

筆者らの研究グループでは1997年より東北アジアの都市形成に関する現況調査³⁾を行ってきたが、本研究はこの調査結果をもとに、東北アジアにおける都市空間の形成を主体の変遷の観点から考察していく研究として位置づけられる。

1.4 研究の方法

1) 現地調査対象都市の選定

①対象都市の選定は、地図・統計資料・市史・当時の案内書記述などを元に、各国人の居留空間および特徴的な地区の分布状況の存在等からブラゴベシチェンスク・ハバロフスク・ウラジオストク・大連・ハルビンの5都市を選定する。

②5都市の空間形成に関わった各国人(各主体)の活動と市街地の形成段階と関係を年表形式でまとめる。

③5都市各人居留空間の分布、都市形成過程での多主体の活動、初期プランの比較をともに5都市から各主体による都市形成の特徴を把握するために詳細な現地調査を行う。

2) 街区形成に関する調査

①街区形成については、各主体が中国東北部・極東ロシアを舞台としてどのような活動を行ったのか、また実際にどのような都市空間を生み出したのかを考察して、対象の各都市に関して各主体別活動が特徴付ける街区を取り上げる。

②街区形態の分析は、i)建物の配置、ii)街区割り、iii)外観のデザイン

の3つの要素から明らかにする。

③対象とする街区の構成空間は、当時の写真および地図を手がかりに復元を試みる。

④街区内の建物配置は、現況の実地調査、利用状況に関する調査などにより既成図面などの修正を行って確認する。

2 中国東北部・極東ロシアにおける都市形成の特徴

2.1 地図から捉えた5都市の特徴

各国人の居留地およびその地区の特徴を図1に示す。また、各主体の活動と都市形成との関係を図2に示す。5都市がメインストリートにおいて主に欧米系の商店を招致していること、中国人街を市街地のエッジに配していることなど同様の都市構造を持っていることが分かった。

小さな村が散在するだけであった極東の地ではロシアの軍人や鉄道建設者が植民化を目的として流入し、条件の良いところ(その後都市が建設される)に宿営を設置し、木造建築を建設した。

つづいて帝政ロシアによる都市計画の立案・決定と共に市街地の建設が始まる。この市街地建設に際し、主として中国山東省から移住してきた中国人労働者は建設期にあった新市街のエッジ(ロシア人施政者による法的な規制に含まれない所)に集住し、いわゆる中国人街を形成する(図1参照)。

一方、新市街中央部ではロシア人による計画が進行し、細かくロット割りがなされた中央部への移住が奨励される。そこにはロシア人移民のほか新たな市場を求める欧米系の商店が進出してくることになる。これらの商店は資本力を背景として市街の中央部に土地を買い、

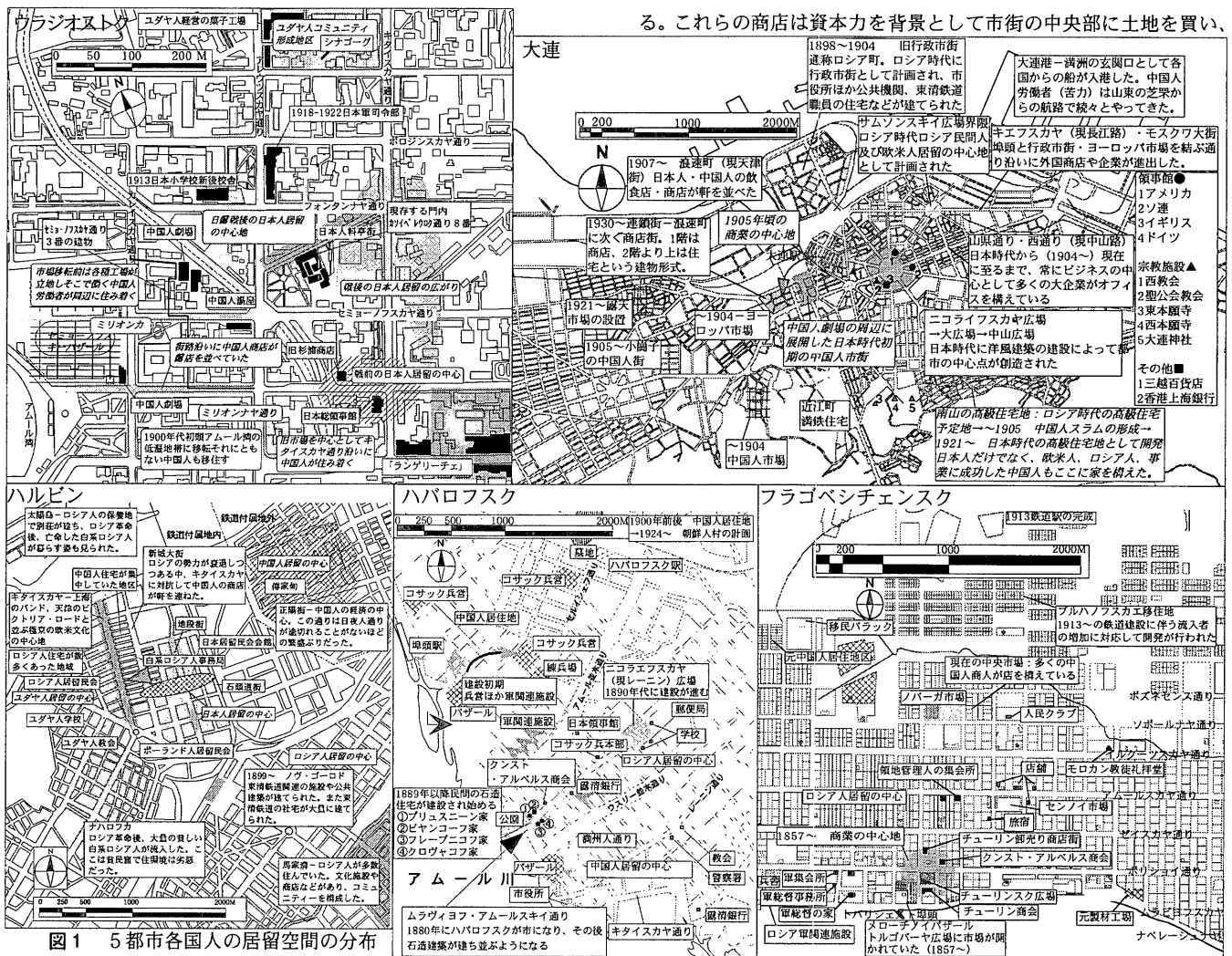


図1 5都市各国人の居留空間の分布

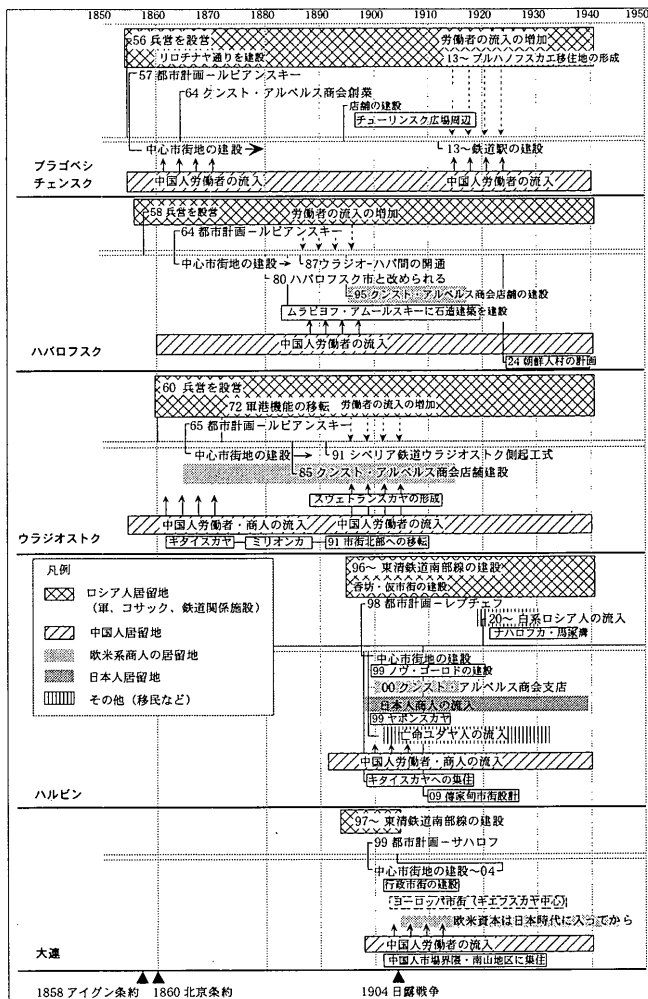


図2 対象5都市の都市形成と各主体の活動

建物を建て、各都市の顔となる空間を形成した。

市街地建設は鉄道の敷設事業の発生と共に第2段階を迎える。そこには中国人・朝鮮人を中心として新たな労働者が流入するが、市街地の拡大と共に労働者の集住地区は新たなエッジへと移転されるケースが多かった。

5都市の中には、空間の特性、形成の背景、都市内における位置づけ、の点で類似した地区を見出すことができる。これは、①同様の主体が5都市の空間形成に重複して関わっていること、②各主体の都市活動及び空間形成はある一定の市街地形成段階において現れること、による。

2.2 5都市の初期プランの比較

5都市の初期プランを比較すると、大別して、ハバロフスク・ウラジオストク・ブラゴベシチェンスクのロシア3都市と、ハルビン・大連の中国2都市は、基本的に性格が異なる。表1に、具体的な相違点を示した。

ロシア3都市の初期プランは、いずれも軍の測量技師であったルビアンスキーが描いたが、ここでは厳格なグリッドパターンが採用されている。ここでのグリッドパターンは土地を分割していく上で最も便利な手法であり、植民地都市に頻繁に用いられた方法である。しかし、明確なゾーニングなどは計画として示されていない。

一方、大連では多核放射状の街路が描かれ、ハルビンではグリッドパターンを基調としながらも、斜交路や放射状街路などを取り入れ、変化に富んだ街路が描かれている。建設工事においては、この計画を

表1 5都市の初期プランの比較

	起源	初期プランの立案年	都市計画者	街路パターン	土地の造成	ゾーニングの有無	施設計画の有無
ブラゴベシチェンスク	1856	1957	ルビアンスキー	グリッド	×	×	×
ハバロフスク	1858	1864	ルビアンスキー	グリッド	○	×	×
ウラジオストク	1860	1865	ルビアンスキー	グリッド	○	×	×
ハルビン	1898	1898	レプチェフ	放射・斜行+グリッド	○	○	○
大連	1898	1899	サハロフ	放射状	○	○	○

実現するために土地造成が行われた。山を削り、海や川（泥沢地）を埋め立てて⁴⁾、平坦な土地を造成した。またハルビン・大連の中国2都市の計画においては、居住者の階級、人種、地区の機能を明確に分け、その中に主要な建物の配置計画を含むゾーニングの考え方が存在していた。このことからハルビン・大連の計画にはロシア3都市よりもゾーニング、施設計画の視点を含んだ都市計画に基づき建設されたと言える。

ロシア3都市の建設開始年は1860年前後、つまり帝政ロシアが東北アジアという未開の地に自国の拠点を築こうと始めた時期である。したがって、都市には流入者の受け皿としての役割が求められていたと考えられる。それに対して中国2都市の建設が始まるのは、それから30数年経った19世紀末のことである。すでにウラジオストクという基盤が存在していたこと、鉄道という移動手段の完成が近かったこと、を考えあわせると、対外的に国力を示すような壮大かつ前衛的な計画が求められていた。即ち、都市建設時の時代背景の違いが初期都市形成に影響を与えていると言える。

2.3 5都市における各主体の都市建設活動の分析

以上の図1、2と表1を関連させてふんせきすると、5都市の都市化過程では多様な都市建設主体が関わっていると共に、各主体は一つの都市に限らず複数の都市と関連していることが分かる。その主体の痕跡から各主体と都市建設との関連性が確認できる都市は限界がある。

1) 5都市ともに、ロシア人移民による都市形成が初期に大きな影響を与えた。特に、極東ロシアのブラゴベシチェンスク・ハバロフスク・ウラジオストクにはグリッドの街路パターンが顕著に現れた。この3都市の中で現在まで初期ロシア人による都市建設が都市形成に軸となっているハバロフスクのムラビヨフ・アムールスキー沿道を中心に分析を行う。

2) 5都市の中心市街地から外され、エッジに形成された中国人街は、中国の伝統的な町並みと欧米の建築が混在した市街化が進んでいった。ここではハルビンの傳家甸を事例として取り上げ分析を行う。

3) 東北アジアの初期都市形成における東清鉄道の附属地における都市建設活動は土地造成が顕著に行われた。その中でも特に、東清鉄道の都市建設活動の影響が高いハルビンの南崗と大連の行政市街の東清鉄道社宅を分析する。

3. ロシア人による都市形成

ロシア軍の調査隊やコサック移民が入ってきた1840～1860年頃の当地は小さな村が点在するのみであり、ほとんど建物らしい建物はなかった。そのためロシア人移民は新たに木造建築を建設した。木造建築が建てられた理由は、①手早く宿泊施設をつくるために工期の短い簡便な建物が求められたからであり、②輸送機関が発達しておらず現地の建築材料に頼らざるをえなかったからである。この結果ロシア人により作られた木造建築は極東アジアに幅広く分布した。

ここでは、木造建築が多く現存するハバロフスクの市街地を事例として取り上げ、①木造建築のデザイン上の特質、②ハバロフスク市街地における木造建築の残存状況、③木造建築が集積する街区形態、について論じる。

3.1 木造建築のデザイン

写真1は、ハバロフスクに現存する木造住宅である。その特徴は、丸太づくりの外壁、窓や軒先のエッジに施された彫刻的装飾に現れている⁹⁾。このような様式を用いた木造建築の源流は中世ロシアまで遡ることができ、その後のロシアにおいて広く使用されている。つまりハバロフスクを始めとした極東の各都市に持ち込まれた木造建築は、広くロシア人一般の文化として根付いていたものであると言える。



写真1 ハバロフスクの木造建築

3.2 ハバロフスクの木造建築

3.2.1 木造建築の分布

都市建設初期の市街地に建てられた建築物は殆どが木造であった⁹⁾。1890～1900頃になるとメインストリートであるムラビヨフ・アムールスキー沿道においては徐々に木造建築が取り壊され、石造建築が建ち始める(写真2,3)。しかし市街の大部分においてはその後も数多くの木造建築が建設された⁷⁾。中心市街地においてもムラビヨフ・アムールスキー通りから細街路に入ると木造の小さな住宅が建ち並ぶという状況であった⁹⁾。現在木造建築の大部分は取り壊されたが、それでも市街地の一部に残っており、その多くは斜面の中腹に

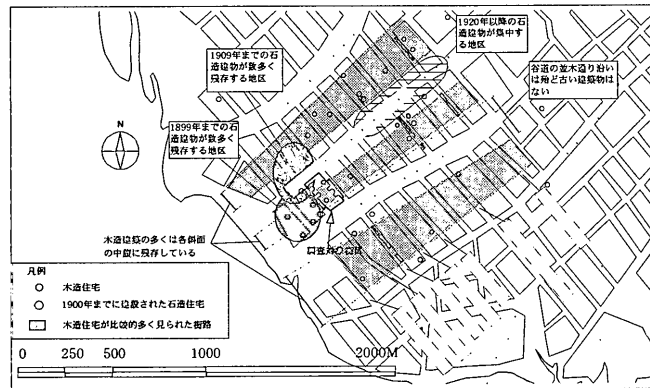


図3 ハバロフスク中心市街地・木造建築の分布

位置している。

3.2.2 街区形態の分析

1) 1864～1880年頃

街区のロット割りには中央に背割り線を配し、各ロットを木製の柵で均等に配分している。各戸の母屋は沿道に配され、敷地内には倉庫・馬小屋などが設置された。

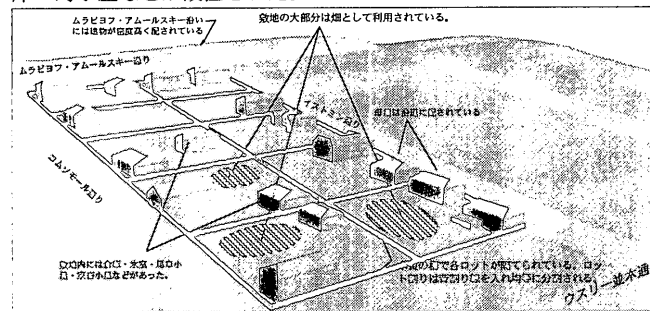


図4 1864～1880年頃中心市街地の街区形態
[ХАБАРОВСКИЙ КРАЙ], ПЯМЯТНИКИ АРХИТЕКТУРЫ ХАБАРОВСКА
2) 1880～現在
1996をもとに作成

1880年にハバロフスクが市に改められると、第2の設計図が作成された。その中では市街地の範囲を拡大すること⁹⁾が計画されているほか、「村落ハバロフスクの市への改造」を目指した委員会が結成

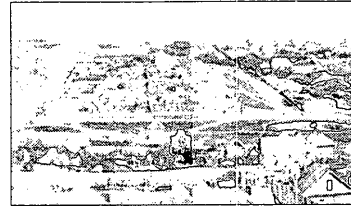


写真2 建設当初のハバロフスク中心市街地

出典: [ХАБАРОВСКИЙ КРАЙ] 初期の市街には殆ど2階建ての木造のみが分布している。初期プランに描かれているように、街区が分割されている。母屋は沿道に配され、敷地内には倉庫ほかの建物が建つ。街路の整備は未だ進んでいないことが分かる。



写真3 建設当初のムラビヨフ・アムールスキー通り

出典: [ХАБАРОВСКИЙ КРАЙ] ムラビヨフ・アムールスキー沿いに木造住宅が建ち並んでいる。各ロットは木製の柵によって囲まれている。街路の整備が遅れており、歩行者道路として板状のものが敷かれている。また街路沿いには電柱が建てられていることが分かる。



図5 ハバロフスク初期プラン(1864年)

出典: [Проектируемого Торова] 初期プランの時点でロット割りの計画がなされている。街区内はまず背割り線が引かれ、その後均等に敷地を分割している。

され、都市建設に関する詳細なプランが作成された。1900年にはメインストリートにおける木造家屋の禁止が協議され、1913年ソボルナヤ広場からニコラーエフスカヤ広場までを対象として実施された。これに伴ってムラビヨフ・アムールスキー通りから木造建築が姿を消す。結果的に木造住宅は斜面の中腹に残存、もしくは新たに建設された。また1914年¹⁰⁾、1924年¹¹⁾の市街地図には谷道である現在の並木道に小さな街区が描かれている。

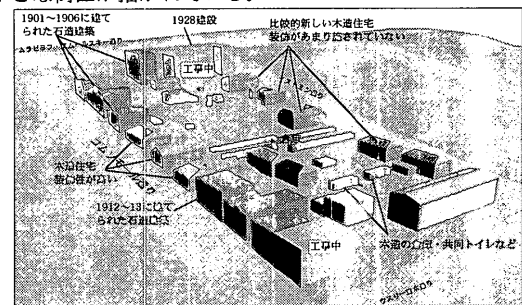


図6 1880～現在・中心市街地の街区形態

3.3 ロシア都市形成の特徴

1) 初期の市街地

初期の移民とともに現れた市街は、均等に分割された敷地に木造建築・畑・馬小屋が並びまことにハバロフスク村であった。初期の市街地建設においては植民が最も重要な課題であり、そのためには定住民である農民の入植が必要だったのである。ルビアンスキーは軍の測量技師として極東の拠点を築いたのであるが、都市を造るという考えよりも移民の定住地を先ず造ることに重点がおかれていた。

2) 中・後期の市街地

ロシア正教の教会を中心にして官庁、商店が配置されたが、細かなデザインには多様性が見られる。これは極東のロシア人が各地からの移民で構成されているという歴史的事実を示すものである。

4. 中国人による都市形成

東北アジアに流入した中国人は多くの場合市街地のエッジに集住地を築いたが、これは単に、同郷の民族が集まって住む、という原理に基づいて形成されたわけではない。これにはロシア人施政者による法的な規制が関わっている。ロシア人は中国人の衛生観に嫌悪感をいだ

いており、それに伴う伝染病の感染を防ぐためにも、1902年極東ロシア各都市を対象として中国人市街（文献には支那人町）の設定が決められた¹²⁾。それにも関わらず、継続的に中国人が流入したのは、①極東の植民事業促進¹³⁾、②鉄道・市街地建設の絶対的な労働力不足の解決、③仕事量に対して賃金の高いロシア人労働者よりも賃金の安い中国人労働者の需要が高かった、④流入した中国人は概ね山東省出身であったが、この山東省が慢性的に窮乏状態にあったこと、などが挙げられる。

本章では、各都市の中心市街地から外され、エッジに形成された中国人街¹⁴⁾について人口規模が最も大きいハルビンの傳家甸を事例として取り上げ、分析を行った。

4.1 傳家甸の建築

傳家甸¹⁵⁾はハルビンの建設事業に伴って発生した中国人市街である。この地区は鉄道付属地には含まれず、その行政権は清国にあった。従ってロシア人の管理が及ばず、独特の市街が形成された。ここで中華バロック¹⁶⁾という様式が生み出されるが、これは欧米系の商店を中心に発展するプリスタン¹⁷⁾を模倣して、資本力を持った中国人商人がその外観のデザインを真似て造ったものである。従ってディテールを見ると独自の表現が施されているほか、街路に沿って隣棟間に全く隙間を作らずに建物を配置して連続的なファサードを形成するなど建物配置の方法や空間構成などはプリスタンとは全く異なるものである（写真4、図8）。さらに面をはぎ取れば全くの中国式住宅であった¹⁸⁾。

傳家甸の中華バロック集合住宅の平面は、四合院住宅がベースとなって計画され、これに西洋的な意匠が合わさって建てられたと考えられる。連なる建物の各所にトンネルの門があり、その奥には中庭を取り囲んだ中庭型の住宅が建てられていた。

1910年代にハルビンの経済的繁栄が進むと、それに呼応して傳家甸でも次々と商店や旅館が新築・改築されていったが、その時期に建てられた建物の多くが中華バロックである。特に1917年ロシア革命によってロシア国内が混乱すると、中国側は東清鉄道に附随する権利、たとえば鉄道附属地の行政権の返還に乗り出し、それと平行して傳家甸の都市再開発が本格化し、次々と中華バロック建築が建て替わられていったのである。中国では19世紀後半から20世紀にかけて近代化政策のなかで、中体西用¹⁹⁾という考え方が生まれており中華バロック建築もまさしく中国東北部都市における文明開化を象徴する共通の建築様式であったと言える。



図7 傳家甸の街路骨格 「哈爾濱案内図」1942をもとに作成

4.2 傳家甸の街区形態

建物はまず道路に平行に建てられて、その後中庭に増築部として、この建物を一辺とし、全体として口の字になるように建てられた。また当時の傳家甸には建築に対する規則や制限は存在しなかったが、中

国人の生活上の慣習によって傳家甸で非常に似たファサードが連続するようになった。

傳家甸の街区内部集合住宅の形状は矩形で背割り型と敷地の両側に街路が通るものに二分される。前者において道路からのエントランスは基本的に1つであるが、後者エントランスは2つになる。両者は共に内部中央に中庭が広がり、その周りを建物が取り囲む中庭型のプランという配置になっている。

道路に面して2～3階建ての中華バロックの装飾を施された建物が連続して並び、道路側からは非常に閉鎖的な印象を与えるが、このような中庭型の集合住宅では中庭に面して階段が取られて、中庭に便所や井戸があり、中庭は居住者が集まる空間として機能している。

こうした中庭型の集合住宅は中国の伝統的な四合院住宅に似ている。当時、ハルビンへの移民の多くが山東省や河北省出身であったことから、傳家甸の中華バロックの集合住宅の平面は北京の四合院住宅がベースとなって計画され、これに西洋的な意匠が合わさって建てられたと考えられる。

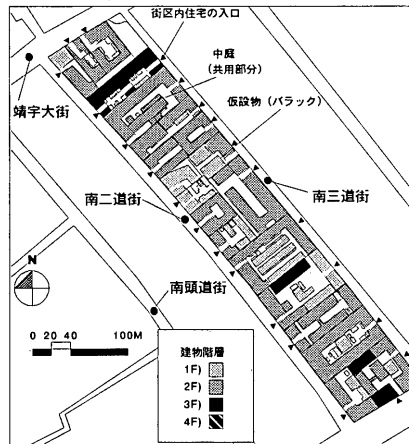


図8 傳家甸街区構成

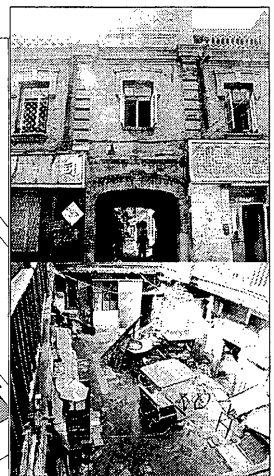


写真4 中華バロックと中庭

5. ロシア人、中国人、日本人等複数民族による都市形成

ここでは、東清鉄道による市街地建設について記述する。初期段階では鉄道敷設とそれに伴う建設・植民事業はロシアの極東における活動を語る上で欠かせない。中でもハルビン・大連における東清鉄道の影響は大きく、他の3都市との違いを明確にしている。これは市街地建設が鉄道敷設を契機として始まったため、その現れとして鉄道関係者の施設が都市の中核機関として計画段階から描かれている。ここではハルビンの南崗（東清鉄道関連職員の住宅区）と大連の旧行政市街を事例として取りあげる。

5.1 ハルビン・南崗の空間形成

ハルビン・南崗はケルベス東清鉄道副理事長の指示に基づいて官庁街として計画され、鉄道関連の施設や公共建築が数多く建設された地区である²⁰⁾。ここでは特に南崗に大量に建設された東清鉄道の社宅に着目する。まず①東清鉄道社宅の類型を示した上で、②その特質を示す。さらに③南崗における東清鉄道住宅の分布状況、及び④その空間構造を示す。

5.1.1 住宅の類型²¹⁾

東清鉄道住宅は大きく分けて、戸建高級住宅と低中層階段室型集合住宅と低層中廊下型集合住宅の3種類がある（表2）。その低層中廊下型集合住宅が最も数多く建てられ、また最も数多く現存する。

5.1.2 東清鉄道住宅の特質²²⁾

1) 建物の配置

表2 ハルビンの東清鉄道住宅の分類

		特徴	種類、型
戸建高級住宅		アール・ヌーヴォー様式が用いられた。現在4戸が残る。	花園街124号の住宅 虹 軍街38号住宅など
低中層階段室型集合住宅	単元型	2階建て。2戸に1つの階段が付られている。	40/4型、60/4型100/4型
	双単元型	3階建て。10戸が入る。	型番号不明
低層中廊下型集合住宅	二戸型	各戸を隔てる壁が平面図の中央に配されている。これには直線型と折れ線型の2種類がある。	12/2型、16/2型18/2型、20/2型26/2型、30/2型
	三戸型	3世帯の床面積は統一されていない矩形平面を3つに分けるため通風の良くない部分が出る。	16/3型、22/3型27/3型、32/3型
	四戸型	各戸の床面積が小さい。比較的生活水準の低い、或いは独自の鉄道職員のために作られた。	30/4型、17/4型24/4型、16/4型

出典：劉松伏「第三次中国近代建築史研究討論会論文集 哈爾濱の中東鐵路住宅」1990

各住宅は基本的に街区の沿道に配置される。この配置の方法を採ることで①街区内に中庭を設け住人の共用空間を確保し、②街区全体の防寒・防風の効果をあげている。

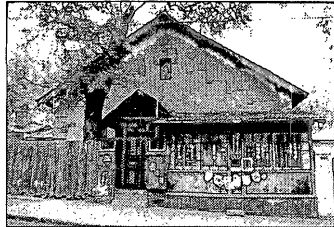


写真5 南崗の東清鉄道住宅

2) 生活補助施設

中庭には井戸、汚水池、公共便所、貯蔵倉庫、氷室（冷蔵庫）、店舗、給湯室、牛・馬小屋などの生活補助施設が完備されている。

3) デザイン上の特質

戸建高級住宅にはアール・ヌーヴォー様式が用いられ、特徴的な外観を示している。低中層階段室型集合住宅と低層中廊下型集合住宅の平面は矩形を基調としている。これは防寒のためなるべく外壁面積を小さくすることを目的としている。また東清鉄道関連の建物はクリーム色を基調とすることが定められている。

5.1.3 東清鉄道住宅の分布²²⁾

南崗の市街地は2本の幹線道路によって4つのブロックに区分されている²³⁾が、最も多くの住宅が残存するのは図9の中、2のエリアである。ここには主に低層中廊下型集合住宅が街区単位で残存している。1は集合住宅地として、4は商業地として開発が進んでおり東清鉄道住宅は、あまり残っていない。3はもともと業務・商業地区として計画された地区である。

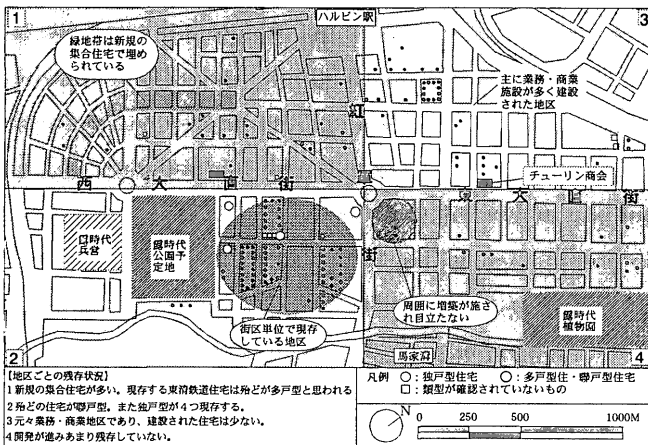


図9 ハルビン・南崗における東清鉄道住宅の分布

5.1.4 街区形態

1) ロシア時代：1899～1930²⁴⁾

今回調査対象とした街区の住宅は全て低層中廊下型集合住宅であった。図11,12よりロシア時代の街区割り切の方法は、基本的には背割り線を設け、各ロットが互い違いになるように敷地を分割している。建物配置の方法、生活補助施設の有無は既述の通りである。図10より生活補助施設が敷地境界線に沿って配されている事がわかる。

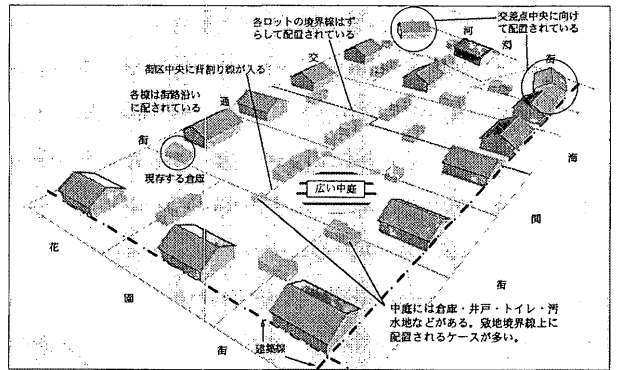


図10 1899～1930 南崗の街区形態「哈爾濱新市街地計画図」1903より作成

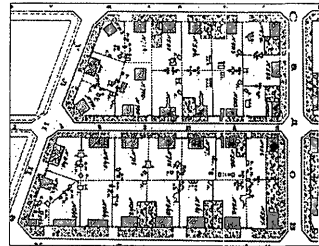


図11 1903年東清鉄道住宅配置

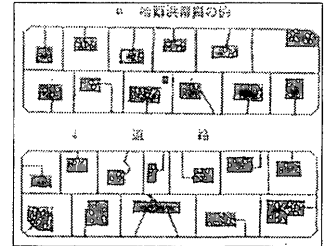


図12 南崗住宅地ロット割りの特徴 出典：越沢明「哈爾濱の都市発達史」

2) 1930～現在

1930年代南崗の住宅地には広い空地が残されていた(図10)。しかしその後の人口増加とともに、各住宅の内部は細分化が行われ、現在では当初2～4世帯の住宅として使っていたものを3～6世帯の住宅として使用しているのが現地調査で確認された。また既存建物の外部にも平屋の住宅を中心に増築が行われていた。

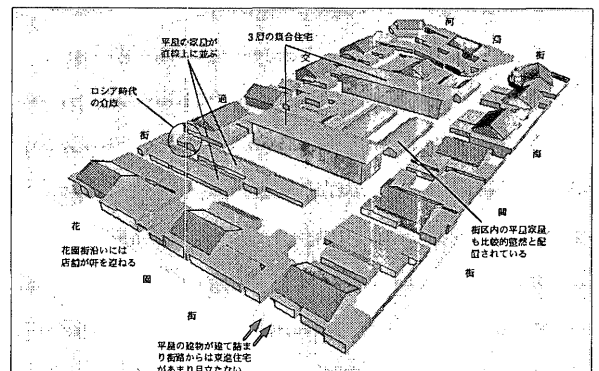


図13 現在・南崗の街区形態

5.2 大連・旧行政市街の形成

ロシア時代のダーリニイ都市計画では、市街地を行政市街・ヨーロッパ市街・中国人街の3地区に区分した。特に行政市街は、民間人には土地の賃貸や売却が行われず、ダーリニイ市行政や東清鉄道に関わる建物が集中的に建てられた⁴⁾。1904年日露戦争に敗れ、ロシアによる都市建設は終止符を打たれるが、その時点ではこの行政市街のみが街としての体裁を整えていた。ここでは東清鉄道住宅の分布とデザイン、街路骨格の特徴を把握し、街区構造の分析を行う。

5.2.1 住宅の分布とデザイン

建築物のタイプとしては、東清鉄道の社員宿舎と考えられるものが最も多い。その分布を見ると、団結街及び勝利街沿いに多く集積していることが分かる。これらの



写真6 南崗の東清鉄道住宅

住宅にはドイツ郊外様式と呼ばれるデザインが施されているが、これは都市計画を担当したサハロフがエンヘンデル¹⁰⁾、ブカリノフスキというドイツ人建築家を招聘したことによる。

5.2.2 街路骨格の特徴

街路骨格は、勝利橋前の広場を中心として、放射状の街路パターンを形成している。旧行政市街の玄関口にあたるこの広場には、勝利街35号住宅(旧東清鉄道汽船会社)などランドマークとなる大型の建築物が配されている。また広場から北側に延びる団結街(旧上海路)が旧行政市街における目抜き通りであり、アイストップとして大連自然博物館(旧ダーリニー市役所)が配置されている。

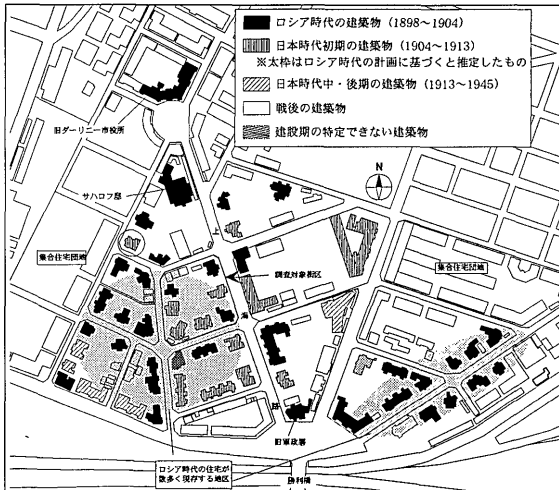


図14 大連・旧行政市街の街路骨格と東清鉄道住宅の分布
「青泥市街家屋調査地図」「大連付属地実測平面図」より作成²⁵⁾

5.2.3 街区形態

1) 1898～1904年：ロシア統治時代

各住宅の敷地は広くとられ、青泥市街家屋調査地図では明確なロット割りとなされていたと考えられる。これは、上海路を目抜き通りと捉えた際の背割りの位置、現存する樹木の配置(ロシア時代の住宅の間に一直線に並べられている)から推定したものである。各住戸は街路沿いに配置され、街区の内部に大きな中庭が設けられている。また上海路沿いに3棟が建築線を揃え、比較的密に並べられていること、あるいは図15左下の住宅が交差点の中央に正面を向けるように斜めに配置されていることから住戸の配置は街並みを考慮して全戸を配置していることが分かる。

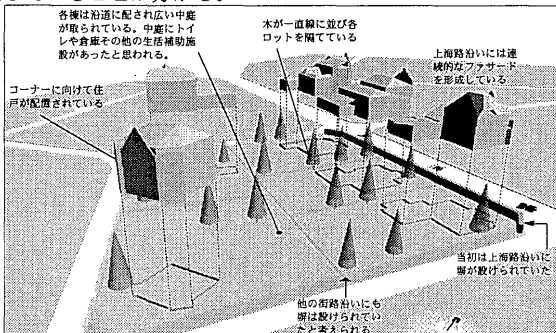


図15 1898～1904旧行政市街の街区形態「青泥市街家屋調査地図」「大連付属地実測平面図」より作成

2) 1904～1945年：日本統治時代

旧行政市街に関しては1904年の時点で街路が敷かれ、建物の建設も行われていた。しかし撤退の際にロシア人の手によって建築物の一部が破壊されたため、まずその修築が行われた。日本(関東州)による最初の都市計画においてはロシア時代の計画を踏襲するという方針がとられた。その際「大連市街家屋建築取締規則(1905年)」が制

定され、細かい条項を定めてバラック建築を防いでいる⁴⁾。この旧行政市街に関してみると、使用者及び管理の母体が東清鉄道から南満州鉄道株式会社(満鉄)に移行しただけでこの地区の都市内での位置づけは変わらなかった。東清鉄道高級社員の住居はそのまま日本の満鉄役員などの住宅として利用され、旧行政市街の良好な居住環境(広い敷地、中庭)は保たれた、と考えられる。その後大連市及び満鉄の発展に伴ってこの地区には満鉄関連の施設・住宅が増えていく。もともとロシア人の為に用意された各住宅の庭は広々としていたため、その空地に日本時代の住宅が増築されたと考えられる。しかし、沿道への配置・中庭の確保というルールは守られている。

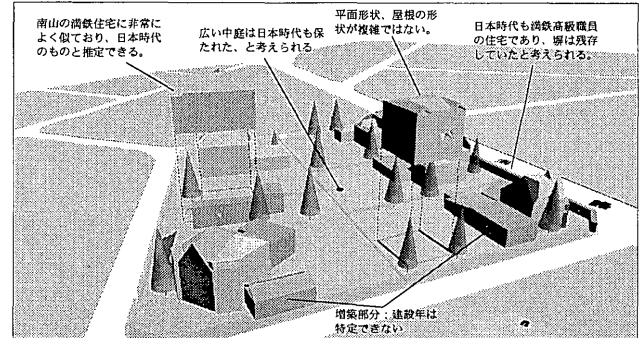


図16 1904～1945・旧行政市街の街区形態「大連付属地実測平面図」より作成

3) 1945～現在：戦後の変化

第2次大戦後、山東省から続々と中国人が流入し、都市人口が急激に増えたこと、さらには文化大革命期における産業の停滞という影響もあって、その後大連市は絶対的な住宅不足に陥った。もともと一戸建てとして使用されていた住宅が4～5世帯の集合住宅として使用されるようになり、内部の部屋割りは細分化が行われていた。また屋外においても、もとの広い庭をつぶしていくように簡便な平屋建ての住宅が続々と建てられていった。その結果、平屋が建て詰まり、大きなオープンスペースは残されていない。しかし、住人が集まる共有地として、街区中央部には、僅かに空地が残された。

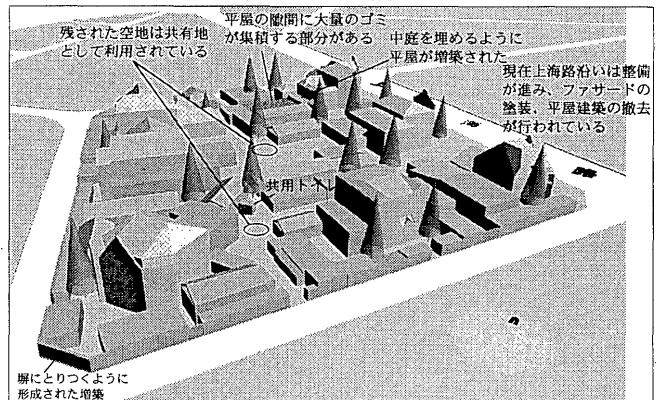


図17 現在・旧行政市街の街区形態

5.3 2都市の東清鉄道住宅の比較

1) 建物配置：2都市の東清鉄道住宅はともに沿道に配され、広い中庭が設けられている。

2) デザイン：大連・旧行政市街の住宅は上級職員のためのもので、殆どの住宅においてドイツ郊外様式が採用されるなどそのデザインに力が入れている。一方、一般職員の為に建てられたハルビン・南崗の住宅は低層中廊下型あるいは低中層階段室型集合住宅であることから判るように、そのデザインも基本的に一つの型に統一されている。

3) 戦後の変遷

ハルビン、大連の東清鉄道住宅地はともに中庭をもつ広い敷地が用

意され良好な生活空間が形成されていた。しかし現在、建物内部は細分化され、その中庭をつぶすように平屋の住宅が増築されている。戦後の人口増加の際に都市の中の住宅建設用地として目を付けられたのがこれら旧東清鉄道住宅地の更新だったのである。

6. 考察 - 東北アジアにおける空間形成上の特徴

6.1 空間形成主体の多様性

東北アジアにおける近代都市形成はロシアの植民政策を契機として始まったが、実質その空間形成においてはロシア、日本、中国、朝鮮、ユダヤなど多様な主体が関わりを持っていた。5都市の空間形成においては、ロシア人が入植、市街地の建設計画を行うと、そこに労働者として中国人や朝鮮人が入ってきたほか、欧米系の商人などが流入し、主体別の特徴を持った地区が形成された。

6.2 各主体によって形成された都市空間の比較

1) ロシア軍人・移民の居留した街区形態が形成した都市空間

建設初期のハバロフスク中心市街地は早期の植民化を進めるため農民移住者の受け皿を用意することが第一の目的とされた。従って単純なグリッドパターンにより敷地割りを行い、そこに木造建築による「農村」的市街を形成した。これは初期のブラゴベシチェンスク、ウラジオストクにおいても同様である。

東北アジアの各都市は帝政ロシアがその端緒を築いた都市である、という捉え方ができ、これは各都市の初期プランをロシア軍の技師が計画したことによる。しかしロシア3都市の初期プランが顕著に示すように、初期プランは都市がつくられる場を提供した、あるいはその範囲を示した、のみである。その意味で施政者による計画も市街地形成の一過程として捉えられるべきである。

2) 中国人集住地の街区形態が形成した都市空間

ハルビンの傳家甸は膨大な中国人流入者の受け皿として高密度集住の機能が要求されていたため狭い街路に沿って建物が隙間なく配置され、また内部空間の構造においては中国の伝統的なスタイルがそのまま採用されている。傳家甸においては外観のデザインは中華バロックという独特の様式が生み出されているが、これは中国的なものと同様の西洋的なのが建築の表層という次元において混合したという事実を示している。

3) ロシア人・中国人・日本人等の形成した街区形態

ハルビン・南崗は全体の市街地計画の中で東清鉄道社宅の用地として計画が行われ、敷地割りは背割り線を入れた後、各ロットが互いに配される。細かくタイプ分けがなされた住宅を建築線に沿って配置し、広い中庭を設けている。またその中庭には生活補助施設が完備されている。大連においては市街地計画の中で行政市街と位置づけられ、上級職員の住宅が数多く建設された。南崗と同様沿道に住宅が配され、中庭が用意された。またドイツ郊外様式を採用するなどそのデザインには力が入られた。

5都市の都市空間形成を総括してみると、各都市建設主体は都市的土地利用の殆どなされていない状態の土地に入り込み、それぞれが持ち込んだ文化や建設技術が各都市形成上に現れているのが分かった。

6.3 今後の研究の展望

東北アジアの都市空間形成の多面性を都市文化の混合・融合という視点で捉えるには、都市空間形成に関係する主体の多様性をより詳細に把握することが課題となる。多様な主体と言っても、本稿において扱ったのは大きく3つの立場、それも空間形成に関わる多数派にのみ

焦点が合わせられていた。今後は原住民など、これまで解明されていない都市の中の少数派民族やその文化にも着目する必要がある。

謝辞：本論文の調査にあつては、山崎壮一、中野友貴、長崎一樹、藤沢友博、増原誠一の方々の協力を仰いだ。記して感謝申し上げます。

注釈と参考文献

- 1) 越沢明の一連の研究は、総じてみれば戦前における日本の植民地・占領地での主に日本人技術者による都市計画の歴史的研究として位置づけられるものだが、哈爾濱の都市計画に関する研究（「哈爾濱の都市計画 1898-1945」総和社、1989）は、ロシアから日本へとその担い手が移り変わった都市計画の特質の違いを扱い、また中国人による空間形成や建築デザインにまで言及するなど、本研究の観点からは、その内容は示唆的である。
- 2) 西澤泰彦の一連の研究は、日本人による建築組織と建築家の動向と活動（海を渡った建築家）彩国社、1996）のほか、歴史的建築物を中心とした都市案内といった成果（「図説満洲都市物語」河出書房新社、1996）もみられる。
- 3) 早稲田大学環日本海研究グループ（主査：戸沼幸市）がこれまで行った現地調査の概要は以下の通り。1992年より、環日本海地域の中でウラジオストク中心市街地の都市空間に関する調査し、1997年より、人・モノ・情報の交流から捉えた東北アジア・環日本海地域の近代都市形成史の枠組みで、中国東北・極東ロシアの都市を調査した。同じ枠組みで2001年より、中国東北地域のハルビン、大連、瀋陽、長春と韓国の釜山、仁川を調査。
- 4) 越沢明「大連の都市形成史（1898～1945年）」日中経済協会報134号、1984、p47
- 5) 木造住宅の窓枠や軒先には幾何学形を用いた装飾が行われているが、各住宅のデザインは同じモチーフを用いながらも微妙に異なる。これは5章で取り上げる東清鉄道社宅のデザインにも共通する傾向である。例えばハルビン南崗の集合住宅はほぼ一定のアール・ヌーヴ様式デザインで統一されている。これは面積計算に基づいた細かい類型が行われているのである。しかし同類型のものでも必ず少しずつ違うディテール表現が施され、一つとして同じものはない。また大連の戸建て住宅に関しては、満鉄が南山において同じものを量産したのに対し、東清鉄道は多様な類型の社宅を建設した。
- 6) 「最初の5年間で町には167の様々な建物が建てられ、すべてそれらは木造であった。」また当初これら木造住宅の建設においては移民事業の一環として資金の貸付が行われている。 Н.Л.Кр а с л и н「ПАМЯТНИКИ АРХИТЕКТУРЫ ХАБАРОВСКА」1996
- 7) 1919年に建造物が四万を超えたが、その多くは木造であった。また1908年～1913年に石造建築が年間10～28増加したのに対し、木造建築は年間69～319建設されている。 Н.Л.Кр а с л и н「ПАМЯТНИКИ АРХИТЕКТУРЫ ХАБАРОВСКА」1996
- 8) ムラビヨフ・アムールスキー通りから横町において坂を下ると、木造の小さな住宅が建ち並んでおり「それら木造の家屋には、町の貴族や商人よりも階級の低い、官吏や町人が住んでいた。」(ゲオルギイ・セミヨノフ・ボチャロフ「わが町-故老のスケッチしたハバロフスク」アムール、1991)
- 9) Н.Л.Кр а с л и н「ПАМЯТНИКИ АРХИТЕКТУРЫ ХАБАРОВСКА」1996
- 10) П.Д.Ан т ъ ХАБАРОВСКА (ハバロフスク計画図) 1914
- 11) А.П.ЛАН Г о р. Х а б а р о в с к а (ハバロフスク市計画図) 1924
- 12) 支那人に関する規則はいずれの都會も共通である。市内に不動産を所有せず支那人は所定の支那町以外に居住するを禁ぜられている。支那人にして市内に不動産を有する者以外に市内居住を許される者は(イ)市民の使用する級、但し夜番を含めて一戸に付き五人以下、(ロ)諸種の工事に従ふ労働者、(ハ)一級乃至二級商人、一級乃至二級職業従事者、一級番頭である。」 8) 参照
- 13) 原 暉之「ウラジオストク物語」三省堂1998
- 14) 5都市の中国人市街

	集住地区の位置と名称	発生の時期と背景	活動の中心	中国人人口の変遷 (人) *括弧内は集人口
ブラゴベシチェンスク	名称なし 市街地西部にバラック群が形成されている。	初期は市街地建設に伴って発生したと考えられるが明確な時期はわからない。	これに関する記録はないが、川岸のパザールが該当すると思われる。	1900 約30000(33,000)
ハバロフスク	名称なし 初期は市街南東部のキタイスカヤ通り、漢州人通り1900前後は鉄道駅の北部	鉄道線北部の中国人街は1890年代の鉄道建設に伴って発生したと考えられる。1890年代にFontayという中国人商人が市街地の一角に中国人のための市街地を建設したという記録が残っている。	これに関する記録はないが、川岸のパザールが該当すると考えられる。	
ウラジオストク	ミリオナリヤ市街西部「セミヨノフの草刈地」と呼ばれていた低層地帯に形成される。	1891～の鉄道建設に伴って自然と発生した。	セミヨノフスキイ・パザール	1878アジア人総数3,441 1900 11,837(30,847) 1910 29,800(90,162) 1913 26,787(94,935)
ハルビン	傳家甸 現在の靖宇街付近、ロシアが認める市街地の外に形成される。	1898～の鉄道建設、1900～のプリスタンの発展に伴い、集住地が形成される。1907年に清国の行政機構拡大が影響される。	正陽街 プリスタン	1916 45,481(89,751) 1918 94,000(157,379) 1920 150,414(286,493)
大連	名称なし 中央広場西 南山地区にもバラックが形成される	1899ロシアの都市計画において中国人街が設定されている。市街地内に組み込まれているが、中心部とは公園で隔離される。	中国人市場	1916 23,768(25,687) 1920 26,439(41,260)

- 15) 傳家甸は、中国人の傳海山という人物が19世紀末にこの付近の土地を取得して小さな宿を構えていたことからこの名がついた。西澤泰彦「満洲都市物語」河出書房新社、1996、p26
- 16) 外観は一見すると西洋古典系建築、特にバロック様式に似ているが、その細部は本来の西洋建築とは大きく異なる建築様式。注15) 同文献 pp.38-40
- 17) 松花江河畔の商業地（埠頭区）。松花江を遡ってきた建設材料はこの地を通して市街地に運ばれたため、松花江埠頭と市街地との連絡路となり、材料の運搬や建設工事に従事する中国人労働者が住みつき、ロシア人の旅館や商店が建ち始め、自然に街が形成された地区。注15) 同文献、pp.24-25
- 18) こうした中庭型の集合住宅は中国の伝統的な方法である四合院住宅に似ているとも言える。
- 19) 中体とは中国固有の思想や精神で、西用とは西洋の技術という意味である。つまり、中国固有の思想や精神を持ちながら西洋の技術を用いて近代化を進めるという考え方であった。
- 20) 新市街は「1898年から99年の初めにかけて、ケルベス東清鉄道副理事長の指示に基づいて新市街を立案し、街路、広場、寺院、病院、鉄道管理局、墓地など主要施設の配置を決定し、1899年春から建設事業」が開始された。越沢明「哈爾濱の都市計画 1898-1945」総和社、1994、pp39-41
- 21) 劉松茂「第三次中国近代建築史研究討論會論文集 哈爾濱の中東鐵路住宅」1990では東清鉄道住宅を独戸型高級住宅、多戸型公寓住宅、聯戸型普通住宅と分類しているが、これらを日本建築学会編「建築設計資料集成」2001、p291に基づき、分類したものである。
- 22) 劉松茂「第三次中国近代建築史研究討論會論文集 哈爾濱の中東鐵路住宅」1990
- 23) 新市街の幹線道路で区切られた四つの地区の内、北側の地区は病院、警察、銀行、郵便局、各国領事館など業務・商業施設が集中している。南側の地区は病院、警察、銀行、郵便局、各国領事館など業務・商業施設が集中している。南側の地区には兵営、パザール、公園が配置されている。注20) 同文献 pp45-47
- 24) 1920年中東（東清）鉄道会社の司法権が中国側に移り、中東鉄道付属地は東省特別区となる。その後1929年までの間に徐々に鉄道付属地の地政権も移行していく。計画当初の街区構造がどの時代まで保たれたか、は明確には分からないが、地政権がロシアから中国に移る1920年代が一つの転換点になると考えられる。
- 25) 具体的には、1913年「大連付属地実測平面図」に記載された建物のうち、ロシア時代の建物を除いたもの。

(2002年3月8日原稿受理、2002年9月25日採用決定)